



## ひとりひとりの保育

齋藤文雄

最近、世間の母親達の間における育児関係の智識の発達は、これに関する諸施設の増加、新聞、雑誌、出版、ラジオ等の普及を媒介としてひと頃とは比べものにならない積極的の進歩を示してゐる。その結果、乳幼児の育て方も上手になり、無知が原因で子供をスポイルするといふような事は大変少くなつた。これは一応誠に慶賀すべきことゝいふに躊躇しないがその反面、何事もすぎたのは及ばざるに如かざるの譬えでこゝ一年半程の間であるが、こういう智識の急速な普及に対する一種の反動が出て来てゐるようである。

大体、施設する指導は——出版物やラジオでするも

のも同様であるが——一応の基準を示すだけのものである。極めて大まかに、個人差というものを抽象して標準的な場合に就いて語るにすぎない。どこまでも基準であるから幸いに問題の乳幼児が標準の場合に該当しておればよいが、具体的には乳幼児のおかれてゐる状態を規制している色々な条件で千差万別であるから、必ずしも施設の指導がそのまゝ当てはまるとは限らない。これはひとり育児の問題に限らず、世上万般のこと凡て然りである。

ところが一般の母親はそうは考えない。日光浴にしろ、睡眠時間にしろ、栄養関係の事柄にしろ、何でも教わつた通りに、あるいは本に書いてあるとおりにしないと気がすまない。具体的な場合というものを考えないで、一律に原則論的知識でやつてみるという傾向が大きい。結果として、そのはねつ返りが何も知らない乳幼児にかゝつてくることになる。本来が、乳幼児を本當にしあわせにするための、育児知識の普及であるべきはずであり、勉強でなければならぬわけである。それが

なまじ知識を有つてゐるために、子供が不幸になるといふようなことがあつたら、それは大いに考えなくてはならぬ事だと思ふ。

例えば子供に何か好ましくない癖があるとする。そういう癖を直すにはどうすればよいかという一応の基準的知識が頭にある母親は、勿論その通りやつてみるが、それで教わつた通りうまくい結果が出ないという事になると、母親はあわてゝあせり出す。これは子供に対する影響も決してよくない。

拘子定規に物を考えないことが必要である。柔軟な弾力性を十二分に有つた考え方をしなければいけない。このことは特に相手が乳幼児という非常にデリケートな存在であるだけに、柔軟性弾力性ということに就いては何程戒慎しても戒慎しすぎるといふことはない。

千差万別といわれるが、乳幼児位千差万別なものはない。子供の家族関係、経済関係、環境の變化、その他色々な条件で非常に個人差がつよい。これに対する最も適

切な育児法は一方的なせまい見地に立つては到底把握出来ないのもつと視野のひろい全体的見地から把握するのではなければ不可能である。

尤もこれは、世間の母親というものが、育児について本当に勉強するのは家庭に入つて自分で子供を有つてからで、その前には学校でも育児法を勉強する機会などあまりないといつてよい。だからいきおい、何か權威に頼つてそれで安心したいという氣持になる事は充分理解出来るけれども、そういうものだといふことが解つただけで問題が解決するわけではない。

こどものあるべき環境を充分に弁えて、その上で理論がどう生かされなければならぬかが決るべきで、眞向から理論をふりかざしてこどもにのぞむ場合いろいろな困難に遭遇する。その抵抗を敢えておし通すと子供は効果からいつて逆の方向に向ふことが屢々である。焦ることなくこどもの環境に応じたわが家の保育が考えられてほしい。